

# Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2012年6月)

発表日2012年8月8日(水)

～足元では好調な直接投資収益が所得収支を下支え～

第一生命経済研究所 経済調査部  
担当 エコノミスト 大塚 崇広  
TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支
				貿易収支	サービス収支		
11	1月	5,478	12,911	3,498	3,684	▲ 186	10,452
	2月	17,008	12,473	3,718	4,865	▲ 1,147	11,072
	3月	17,386	9,485	▲ 1,282	528	▲ 1,811	11,349
	4月	4,239	5,755	▲ 6,041	▲ 4,650	▲ 1,390	12,613
	5月	5,744	3,525	▲ 7,517	▲ 6,314	▲ 1,203	11,945
	6月	5,389	9,590	▲ 1,107	35	▲ 1,142	11,670
	7月	10,537	8,237	▲ 2,263	▲ 582	▲ 1,681	11,385
	8月	4,363	6,971	▲ 4,008	▲ 2,059	▲ 1,949	11,808
	9月	16,107	10,255	▲ 1,210	227	▲ 1,438	12,250
	10月	5,339	4,703	▲ 7,409	▲ 5,363	▲ 2,046	12,717
	11月	1,261	5,123	▲ 5,920	▲ 4,047	▲ 1,873	12,193
	12月	2,657	6,991	▲ 4,271	▲ 2,441	▲ 1,829	12,367
12	1月	▲ 4,556	1,209	▲ 7,914	▲ 7,056	▲ 858	10,476
	2月	12,026	8,757	▲ 2,421	▲ 496	▲ 1,925	11,605
	3月	13,074	4,879	▲ 4,991	▲ 3,775	▲ 1,216	10,815
	4月	3,338	2,886	▲ 8,498	▲ 5,558	▲ 2,940	12,296
	5月	2,151	2,822	▲ 6,452	▲ 4,498	▲ 1,954	10,561
	6月	4,333	7,736	▲ 3,619	▲ 1,666	▲ 1,953	12,135

(出所)財務省「国際収支統計」

## ○ 6月は経常収支は季節調整値で前月から黒字幅が拡大

6月の経常収支は原数値で4,333億円の黒字と、ほぼコンセンサス(4,152億円、レンジ:2,660億円～5,600億円)通りの結果となった。季節調整値では、7,736億円の黒字となり前月(2,822億円)から黒字幅が拡大した。主因は貿易赤字の縮小であり、資源価格の下落を受け価格面から輸入金額が下押しされた影響が大きい。

貿易収支の内容を季節調整値でみると、輸入金額は減少したものの、輸出は回復感に欠ける動きとなっている。既発表の通関統計で地域別の輸出の推移をみると、ASEAN向けが好調さを保つ一方で、EU向けは減少傾向にあり、中国向けも冴えない動きが続いている。債務問題による欧州経済の低迷が欧州向けの輸出を下押ししていることに加え、間接的に中国向け輸出に悪影響を与えている可能性がある。中国は日本から電子部品等の中間財を輸入し、完成品を欧州等に輸出を行うといった貿易構造をもつため、欧州経済の低迷は電子部品等を中心とした日本の中国向け輸出に下押し圧力となっているものとみられる。

## ○ 6月の貿易外収支の内訳：証券投資収益は伸び悩む一方で、直接投資収益は増勢を保つ

貿易外収支の内訳を季節調整値で確認すると、サービス収支は1,953億円の赤字となり前月(▲1,954億円)から横ばいであった。内訳としては、振れの激しいその他サービス収支が黒字に転じた一方で、輸送収支は受取の減少で赤字幅が拡大した。旅行収支はほぼ横ばいでの推移であった。

所得収支は、12,135億円の黒字となり前月（10,561億円）から黒字幅が拡大した。内訳としては、証券投資収益がほぼ横ばいであった一方で、直接投資収益は黒字幅を拡大させた。このところの所得収支は、証券投資収益が金利の低下を背景に頭打ちとなる一方で、直接投資収益が日本企業の海外進出を背景に増勢を保つことで、全体として高水準の黒字を維持する構図となっている。

## ○ 経常収支は当面低水準での推移となる見込み

4-6月期の経常収支は季節調整値で13,444億円の黒字と前期（14,846億円）からやや黒字幅が縮小し、引き続き低水準の黒字となっている。所得収支は直接投資収益の拡大を背景に前期比で黒字幅が拡大したが、貿易収支は赤字が継続しており、貿易収支の赤字を高水準の所得収支の黒字が補う構図に変わりはない。

先行きについては、貿易収支は当面赤字基調が続こう。原油価格の高騰には足元で一服感があるものの、海外経済の弱さを背景に輸出が回復感に欠ける動きとなる可能性が高いため、貿易収支の赤字幅が縮小するペースは緩慢なものにとどまろう。高水準の黒字を保つ所得収支のうち直接投資収益については、対外直接投資残高は比較的収益率の高いアジアを中心に増加傾向にあり、そこから得られる収益は今後も増勢を保つものと予想される。一方で、ウェイトの大きい証券投資収益は金利の低下で今後は伸び悩む可能性が高いだろう。総じて、経常収支の黒字は当面は低水準での推移が予想される。

